

平成27年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】



平成28年2月
独立行政法人農畜産業振興機構

【要約版】

1 平成 26 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

■平成 26 年度の肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200～300 頭未満」17.3%、「300～500 頭未満」16.3%、「500～1,000 頭未満」17.6%、「1,000～1,500 頭未満」8.7%、「1,500～2,000 頭未満」5.2%、「2,000～3,000 頭未満」3.8%、「3,000 頭以上」6.2%であった。

■品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体の割合は、黒毛和種が「200 頭以上」で 59.0%、交雑種が「200 頭以上」で 56.9%、乳用種が「200 頭以上」で 69.4%となった。

(2) 経営土地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の 1 経営体当たりの経営土地面積（平均）は、200 頭以上の経営体が 44.9ha、畜産用地は、200 頭以上の経営体が 38.0ha であった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、200 頭以上の経営体では「畜産専業」70.5%、「複合経営」16.1%、「兼業経営」12.4%であった。

■経営形態は、200 頭以上の経営体では、「肥育専業経営」が 49.3%、「繁殖・肥育一貫経営」が 23.0%、「乳肉複合経営」が 5.5%、「育成・肥育経営」が 16.1%等となっている。飼養規模の大きい経営体の方が肥育専業経営の割合が高い傾向にある。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 5 億 6,400 万円となっている。

■肉用牛関連の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 4 億 6,400 万円となっている。

(5) 労働力

■肉用牛関連に従事する家族労働力は、200 頭以上の経営体では平均 2.6 人であった。

■肉用牛関連の正社員は、200 頭以上の経営体では平均 6.2 人であった。

■肉用牛関連の非正社員は、200 頭以上の経営体では平均 3.4 人であった。

■肉用牛関連作業における 1 日当たりの平均労働時間は、200 頭以上の経営体では 7.6 時間であった。

2 生産費（肥育牛1頭あたり）

■品種別に見ると、200頭以上の経営体では、黒毛和種 954,286円、交雑種 691,664円、乳用種 470,904円となっている。もと畜費や飼料費の高騰の影響を受けて、生産費は上昇傾向にあり、黒毛和種の実生産費は1頭あたり100万円台に迫る金額となっている。

<生産費（肥育牛1頭あたり）> 200頭以上の経営体

	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・探草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)
黒毛和種	499,341	278,709	24,253	13,025	17,031	2,816	13,852	9,421	7,443	23,687	8,370	5,951	43,384	11,642	4,667	9,307	954,286
交雑種	270,976	281,043	25,273	10,405	12,200	5,606	9,794	6,870	6,839	19,541	7,208	3,947	28,625	7,037	5,714	9,414	691,664
乳用種	131,444	247,000	13,150	11,071	7,241	3,885	6,783	6,650	3,045	11,960	5,895	3,571	16,520	6,053	3,385	6,749	470,904

3 もと畜の導入状況

■もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が315頭、「交雑種（初生牛）」が462頭、「交雑種（子牛）」が429頭、「乳用種（初生牛）」が590頭、「乳用種（子牛）」が602頭となっている。

■1頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が490,163円、「交雑種（初生牛）」が162,835円、「交雑種（子牛）」が263,080円、「乳用種（初生牛）」が46,440円、「乳用種（子牛）」が128,517円である。

■もと畜（黒毛和種）を外部から導入する際に重視する点は、「血統」「価格」「体型の良し悪し」「健康状態」「発育状態」が上位となっている。交雑種では、「健康状態」「体型の良し悪し」「価格」「血統」「発育状態」、乳用種（初生牛）では、「健康状態」「価格」「発育状態」「体型の良し悪し」、乳用種（子牛）では、「健康状態」「体型の良し悪し」「発育状態」「価格」が上位となっている。

4 肥育牛の出荷状況

■黒毛和種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均437頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で1,990円/kg、相対取引で1,923円/kgとなっており、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られない。

■交雑種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均722頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で1,237円/kg、相対取引で1,231円/kgとなっている。黒毛和種と同様に、交雑種でも市場出荷と相対取引では、大きな価格差は生じていない。

- 乳用種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 875 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 842 円/kg、相対取引で 794 円/kg となっている。
- 年間の副産物（きゅう肥）の状況は、200 頭以上の経営体で、平均年間販売数量が 2,814 トン、金額が 605 万円となっている。
- 市場出荷の実施は、200 頭以上の経営体で平均 4.8 割、相対取引の実施は、平均 5.0 割となっている。飼養規模の大きな経営体は、相対取引の実績が多い。相対取引の相手先は「法人」が 7 割であり、地域も「県内」が多い。

5 繁殖雌牛の種付状況

- 黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 73.5%となっている。
- 乳用種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 59.7%となっている。交雑種の種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は 66.7%となっている。

6 飼料の給与状況

- 給与している飼料は、200 頭以上の経営体では「稲わら」、「成畜用配合飼料」、「大麦」、「とうもろこし」、「ふすま」等が上位となっている。
- 肥育牛の給与状況（1 日あたりの 1 頭への給与量）を見ると、肥育前期では 7.8kg、肥育中期では 10.1kg、仕上げ期では 9.7kg となっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、200 頭以上の経営体の使用率は 87.3%となっている。ただし、近年は住宅着工件数の減少や輸入製材の増加等により、「おが粉」は入手しづらい状況にあり、今後は、「バーク」や「建築廃材」「綿くず」など、他の敷料を使用するケースも考えられる。

8 取り組んでいる経営努力

- 200 頭以上の経営体が現在行なっている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（62.9%）」「機械化を積極的に進めている（44.6%）」「もと畜を低コストで導入する（42.1%）」「低価格の敷料調達に努めている（40.1%）」等が多い。
- 今後 3 年間の経営展開について、200 頭以上の経営体では「増頭」が 33.2%、「現状維持」が 59.8%

であり、「減少」「生産しない」が7.0%となっている。

- 増頭する理由は、「出荷先があるため」がもっとも多く、50%以上を占めている。規模拡大への課題は、「子牛の導入価格・販売価格の動向（64.6%）」「資金繰り（61.5%）」「施設・機械の更新・拡大（53.8%）」「肥育牛の販売価格の動向（49.2%）」「土地面積の拡大（40.0%）」等である。
- 一方、経営規模を「現状維持」「減少する」理由は、「飼料・資材費価格の高騰」が圧倒的に多く、半数以上を占めている。その他としては、「もと畜の高騰」「後継者不足」等も理由としてあげられている。